

当するのではなく、同じ土俵で同じように生活すること、遊ぶこと、学ぶこと、働くことが可能になるような支援こそが必要とされている。それを実践しようとしてきたのが、私たちの活動だ。

挑戦するチャンスを与えられた人

「チャレンジド」という言葉は？

この言葉に出会ったのは、1995年、阪神・淡路大震災の直後だった。アメリカにいる支援者が、最近アメリカでは「Handicapped person」や「Disabled person」のように、できないことに着目するネガティブな呼び方をやめて、「Challenged (チャレンジド)」という言葉を使っていると教えてくれた。「挑戦する使命や課題、チャンスを生かすから与えられた人」という意味で、「すべての人間には自分の課題に向き合う力が必ずあり、課題の大きい人にはそういう力がたくさん与えられている。だから、日本でいう『障害者』だけじゃなくて、震災からの復興に立ち向かう人もチャレンジドだ」と励ましてくれた。

私は、震災で自宅が全焼してぼう然自失の状態だったが、その言葉を聞いた瞬間、ごっつい元気が出た。それで「こんな言葉を聞いたよ」と言ってみたら、みんな「そうだ、僕は障害者ちゃうねん。チャレンジドやねん」と元気になった。それで瓦礫の中からパソコンを掘り出して、パソコン通信でつないで、「僕は生きてい

る」「私は無事」という安否確認や、「車椅子でお湯を使わせてくれるところはないか」「今日はあそこで弁当を配っている」という情報を昼夜を問わず流し続けた。

日本で初めてのパソコンボランティアは、被災した重度のチャレンジドたちが、この言葉に勇気づけられて、掘り起こしたパソコンから始まったのだ。そのとき私は、コンピュータはただの箱ではない、この箱の向こうに人がいて、人と人がつながる道具なんだということを実感した。プロップが発足するとき、彼らが「コンピュータが働くための道具になる」と言った意味が、はつきりわかった。

多様な働き方をバックアップ

「労働組合が一緒にできることは？」

いま、日本で、チャレンジドが働くことをバックアップする制度は、障害者雇用促

進法の法定雇用率しかない。民間企業では1.8%で、これを満たせない場合は納付金を徴収するという制度だが、そもそも重度で介護を受けているようなチャレンジドは、その対象にもならない。想定する働き方のイメージが、「正規雇用されて、毎日出勤して、フルタイムで働く」という固定的なものであるからだ。

労働組合も、そんな働き方をしている雇用労働者のための組織であり、チャレンジドにとっては、まったく入れない世界で闘っている人たちだと、ずっと思っていた。でも、政府の会議などで連合の人たちと知り合って、連合が、非正規労働者もふくめて「すべての働く人たち」のために活動しているを知った。これはちゃんと手をつないで一緒にやっていかなければと思うようになった。

非正規労働者は、正社員に比べて給料も安いし、簡単にクビになるし、教育訓練の機会も乏しい。でも、非正規と括られる働き方が「悪」だという捉え方は、絶対違うと思う。正規で働きたいのにアルバイトしかないという状況はもちろん問題だが、チャレンジドと同じように、家族や健康上の事情で正社員という条件では働けないけど、自分に合ったスタイルで働きたいという人はたくさんいる。「自分がいるところがオフィス」なら働ける、働きたいという人がたくさんいる。だとすれば、固定的な働き方にとらわれないで、誰でも、どんな働き方でも、誇りをもって働けるようにすることが、労働組合の役割ではないか。

チャレンジドの就労支援の問題は、女性の問題と似ている。女性だって数十年前ま



チャレンジド就労支援 ICTセミナー (神戸)

で、参政権もなく、外で働くなんてとんでもないと言われていた。でも、「私たちが男性と共に社会を支える一員になりたい」という女性たちが出てきて、いまでは多くの女性が社会のさまざまな分野で活躍している。

私は、働きたい人のお尻を叩いて「働け」という気はまったくない。ただ、働きたいという意思を持っている人を眠らせるほど、社会にとってもつたいないことはない。女性だから働けない、障害があるから働けないのではなく、その持っている力を発揮させるシステムがないから働けないのだ。だから、多様な働き方という切り口で、労働組合と一緒に「働く」ということを考え、そして、それをバックアップする制度をつくっていききたい。



「神戸スイーツ・コンソーシアム」遠隔講習会
メイン会場で受講生の作業を見つめる講師と遠隔中継のカメラクルー